

「主観」と「客観」について

今回「主観」と「客観」についての考察を重ねていく前に、最初に一つの命題を提示しておきたいと思う。

『「主観」と「客観」とは、本当に相対する概念なのであろうか？』

事実、現状多くの人が「主観と客観」とを対にして捉え、国語の対義語の試験などでもこの二つの言葉を正答の一例として出題する程である。しかし、本当にこれらの言葉は正反対の概念を示す言葉なのだろうか。結論から言えば、私は「主観」と「客観」とは対極に位置する概念ではないのではないかと考えている。その事について論証するにあたり、それぞれの言葉の定義について探っていきたいと思う。ここでは、まず「主観」とは何なのか、という事について論を進める事にする。

一般的に「主観」という言葉は、「個人が人生を通じて培い育んできた個々人に固有・特有の価値観や判断基準に基づいて導き出される一つの論理・思考体系」と言った意味合いで使われる事が多い様に思われる。それを「自己中心的な物の見方」と要約してしまう事もあながち暴論とは言い切れないのではなかろうか。

私も、大筋においてはこの意見に賛成である。しかしながら、この「主観」の定義を是とするのであれば、この定義の対義語とされる「客観」の定義は次の様なものになると推察される。「個々人に固有・特有の価値観や判断基準を排除し、純然たる事実や普遍的な真理の様なものに基づいて導き出される一つの論理・思考体系」といった具合ではなかろうか。

なるほど。一見、確かに論理的には成立している様にも見える。だがしかし、ここで一つの疑問が生まれる。「客観」が「主観」を排する事を前提にしている以上、「真なる客観」はあり得ないのではないか。つまり、「客観的」な判断の基準に据える「純然たる事実や普遍的な真理」というものですら、その人個人が無数にある可能性の中から「これこそが純然たる事実なんだ」と選び取ったものに過ぎず、その時点でその人の「主観」を介してしまっており、また逆説的に「主観」を介さずして何か物事を選択・判断する事は実際的に不可能であると言えるのではないだろうか。

では、「主観」を介在させずに行動する事は人間には不可能であるという前提に立つのであれば、「客観」あるいは「客観性」と呼ばれるものは一体どの様に定義すれば良いのであろうか。それについて探る為に、一旦「主観」の定義についての考察に立ち返りたいと思う。

先程、私は一般的な「主観」の定義に対して「大筋において」賛成であると述べた。私が全面的な賛同に至らない理由は、先述の定義に加えたい些少の補足があるからである。

自己の中に確立された価値観や判断基準というものを紐解いた時、私はそこに内包されているものの中で最も根源的で最も支配的であるのは、「希望」あるいは「願望」といったものではないかと考える。それも「身勝手な」という形容句に修飾されたものである。

つまり人間とは、物事を選択したり判断したりする際に、選び取り導き出す「答え」に「こうであって欲しい」とか「こうあるべきである」などという識閥下の衝動的な「期待」を多分に反映させてしまう習性がある生き物なのではないか、というのが私見である。

近年の自己啓発ブームの所為もあり、「人間は未来に期待をするからこそ生きていく事が出来るのである」といった類の主張を多くの心理学者たちが唱えるのを目や耳にする機会は決して少なくない様に思う。

私も幾つもの書籍の中で同様の主張を幾度となく目にしてきたし、また彼らの示す論理に少なからず共感を覚え賛同もした。私はこの人間の「未来に期待をする性質」というものが「主観」に及ぼす影響は決して小さなものではないと考える。思うに、無数の小さな「決断」の積み重ねが「未来」を形作るのであるという論に立つならば、「未来」に「期待」する性質を持つとされる生き物が取捨選択を経て下す「決断」に、自己の「期待」を投影してしまう事は論理的に無理からぬ事ではなかろうか。

そしてその「決断」を下す際の判断基準となるものを「主観」と呼称するのであれば、「主観」と「期待」との間に成立する相関性に疑問を抱く事は、私には難しいと言わざるを得ない。

さて、「識閥下の希望・願望が色濃く投影された個々人の価値観に基づく論理・思考体系が主観である」という新たな「主観」の定義を手にした今、もう一度改めて「客観」の定義というものについて考察を深める事にする。「客観」の正体についての論を進める前に、まず「客観」の定義に関する私的な結論から提示したいと思う。

「客観」とは『不特定多数の人間の間で共有される「道徳性」あるいは「倫理観」などと呼ばれる概念によって最大公約数的に形成される社会的な価値観に基づいて導き出される一つの論理・思考体系である』というのが個人的な見解である。では、ここで言う「道徳」あるいは「倫理」とは一体何を指しているのだろうか。

私は「道徳」や「倫理」とは、いや「道徳」や「倫理」も、と言うべきか、とにかくそれらは「希望」あるいは「願望」といった感情に識閥下で根差している概念であると考えている。こう言ってしまうと「主観」と「客観」の概念の間に差異を見出すのは難しくなるであろう。故に一つ、両者の間に存在する決定的な違いを主張したいと思う。

前述した様に、「主観」が根差す「願望」を飾る形容句が「身勝手な」というものであるとするならば、「客観」の根差すそれが冠するのは「道徳的・倫理的に理想とされる」という形容句である、というのが持論である。

つまり、「道徳」や「倫理」といった概念・価値観には、特定の時代、特定の地域における人々に共有される「人間としての理想的な生き方や在り方」といった、人々の「こうありたい」とか「そうあるべきである」というある種の夢想的な「希望」や「願望」、言い換えるならば「理想」が色濃く投影されているものと私は考える。

ところで、「主観」と「客観」との双方に強い影響を及ぼしていると考えられる「希望」や「願望」などと称される人間の中に眠る根源的な欲求であるが、ここでそれぞれ「内発的期待」と「外因的理想」という表現を以てその働きや及ぼす影響の方向性の差別化を図っておきたいと思う。

ここで言う「内発的期待」とは、つまり「主観的」な判断を下す際に人は自己の内面に形成された価値観から生じた「期待」に従い、またその影響も自己に対してのみに留まるという事を意味している。

また「外因的理想」とは、人が「客観的」とされる判断を下す際には、不特定多数によって形成された集合体的な価値観、つまり自己の外に置かれた価値観から生じた「理想」からの影響を受けている、という事である。

さて、では「客観」が「道徳」や「倫理」といった価値観からの影響を免れ得ず、また「道徳」や「倫理」といった概念が大多数の人間の識閥下に存在する夢想的な「理想」によって形作られる

とするのであれば、三段論法的に「客観」と「理想」との間にもやはり相関性は成り立つと言えるのではないだろうか。

そして、仮にそうであるとするならば、内発的か外因的か、発生源が個人か不特定多数の集合体か、などの違いはあれど、「希望」や「願望」と称される人間の識閾下の衝動的な欲求に対して被支配的であるという点に置いて、「主観」と「客観」とは本質的に同質の概念であると言えるのではないだろうか。これこそが、最初に提示した命題に対する私の解答である。

また、「主観」と「客観」が本質的に同質の概念であるとするならば、「真なる客観」などというものもまた存在せず、「客観性のある人」というのは単にその時代のその地域のその文脈における最大公約数的な「模範解答」を意識的に選び取る能力に長けている人間、あるいは単に「主観」が無意識的に選び取る選択肢がそれらの「模範解答(群)」にたまたま近似している人間に過ぎないのではないだろうか。

ここまで「主観」と「客観」について長々と書き連ねてきたが、以上を以て論を結びたいと思う。